



松本和寿 著『子ども観と評価でみる学校教育史 経験主義教育に学ぶ子どもはどう評価されたか』

馬場, 大樹

(Citation)

研究論叢, 30:119-122

(Issue Date)

2024-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491467>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491467>



5. 書 評

松本 和寿 著

『子ども観と評価でみる学校教育史 経験主義教育に学ぶ子どもはどう評価されたか』

馬場 大樹 (鳴門教育大学)

本書は、2021年に九州大学大学院に提出された学位請求論文「戦後教育改革期の『教育評価』に関する研究—全人的な評価における『教育測定』の役割とその変化—」の内容を大幅に加筆し、2023年度科学研究費助成事業・科学研究費補助金・研究成果公開促進費(学術図書)の助成を受け出版されたものである。

本書の目的は、戦後教育改革期における経験主義に特徴づけられる教育実践をめぐって、全人的な子ども観に基づく評価のあり方やその変化を明らかにすることにある。戦後教育改革期の教育実践を対象とした歴史研究は数多く蓄積されているものの、その多くはカリキュラム論や指導方法に焦点が当てられている。その中で本書の新規性は、①卓越的な教育実践に限らず教育現場一般が直面した実践的な課題としての「評価」に焦点を当てたこと、②個別的教育実践を対象とするのではなく、諸機関から提示される評価をめぐる言説や実践的提案を手がかりに、当時めざされた全人的な子ども観に基づく評価の歴史的な変化を検討したこと、の2点にある。

以上の目的に沿って、本書では具体的に以下三つの課題に取り組まれている。①態度の評価や特性を把握する方法が当初どのように理解され、教育現場がそれをどう具体化したのか。②全人的な子ども観に基づく評価が進められたこの時期に、五段階相対評価や標

準検査がいかなる意図において導入され、その学力を含む多様な特性の記録が実際にどのように行われたのか。③態度の評価や特性の把握をめぐる問題が全人的な子ども観に与えた影響は何か。これら三つの課題を通じて、戦前の主観的評価の反省に立ち客観的評価を求めた教育現場が、全人的な子ども観に基づく評価のあり方についていかに頭を悩ませ、対処しようとしていたかが明らかにされる。と同時に、その実践上の困難性が結果として戦後教育の理念を棚上げさせたことが歴史的に描かれている。

以下、本書の内容をみていきたい。本書は戦後教育改革期に関する歴史研究としての位置づけや上述した諸課題について述べられる序章と、研究の総括とその意義が析出される終章のほか、上三つの課題に概ね対応した三部構成をとる。

第Ⅰ部「経験主義教育における学力をめぐる議論と態度の評価」では、1947年の「学習指導要領一般編(試案)」の公表からその改訂版が出された1951年付近までの期間において、全人的な子ども観に基づく態度の評価や児童生徒の多様な特性の把握がどのように理解され、実施されていたかが多面的に明らかにされる。まず第一章では、学術的な動向として、コア・カリキュラム連盟や学力低下批判をめぐる議論において経験主義教育のカリキュラム構造に関する議論が先行し、態度への評価に関する検討が先送りとなっていたことが確認される。第二章ではこうした言説状況の検討から転じて、文部省や研究者が主催する講習会の内容を手がかりに、日常的な指導における態度への評価が具体的にどのように構想されていたのかが示される。そこで

は、児童の言動に対する日々の記録やその解釈を主にしながら補完的に客観テストを利用することが提起されていた。

しかしながら、日常的な指導とは異なり、新制高等学校の入学選抜試験や全国的な学力調査においては、態度についても客観テストで評価せざるをえない。そこで第三章、第四章では、その両場面において態度がどのように評価されていたのかに焦点が当てられる。それらは、児童生徒が建前的な回答をする可能性を含むなど、態度を客観テストで測定することの困難を大きく抱えたものであった。

第Ⅱ部では、全人格的な子ども観に基づく評価が進められた同時代において、五段階相対評価や標準検査がいかなる論理において導入され、受容されたかが明らかにされる。そのためにもまず第一章、第二章では、戦後教育改革の実践的中心として提起された「ガイダンス」に焦点が当てられる。ガイダンスとは、単なる生徒指導や進路指導とは区別される、教科の学力も含んだ総体的な子ども把握に基づく教育活動として、戦後教育改革期に導入されたものである。具体的には、生活背景や日々の言動の観察記録のみならず、五段階相対評価や標準検査によって示される学力も加えた多様な情報の総体をもとに児童生徒の全体像をとらえ、指導の方策が検討された。その検討は、各教師によって実施される「ケース・スタディ」や、場合によっては専門家や学校関係者が集まり、共に指導の方策を考究する「ガイダンス・カンファレンス」の形をとることもあった。

その上で第三章では、ガイダンスにおいて把握することが求められる子どもの特性の一つとして、五段階相対評価や知能検査、標準学力検査の結果が受容されてきたことが示される。それゆえに、それらは学力の相対化を意とするというよりもむしろ、学力に応じた指導の実現や、科学的な根拠に基づく評価を

実現するという教育現場の意志を反映させたものであった。続く第四章では、ガイダンスにおいて求められる総体的な子ども把握がいかなる形で実施されていたかについて明らかにされている。具体的には、学力も含めた多様な情報を一つの様式に集約するための「小学校学籍簿」や中等学校用の「累加記録適用」、また教師が言動の記録のために日々携行した「補助簿」などの道具を手がかりとして、その実的なあり方を詳らかにしている。

第Ⅲ部では、ここまで述べてきた全人格的な子ども観に基づく評価がいかなる理由で、どのように変質していったかが明らかにされる。まず第一章では、1955年に「累加記録適用」の次の学籍簿として改訂された「生徒指導要録」の内容や、その改訂の経緯が確認される。そこでは、教師にとって日常的な記録の蓄積とその更新が实际的に極めて困難であり、こうした困難性が、新しく改訂された「生徒指導要録」に「指導のための記録」ではなく「対外証明のための記録」としての傾向を強くさせたことが示されている。第二章ではその動向に付随して、指導改善のために用いられるはずであった五段階相対評価や標準学力検査が、徐々に子どもの学力そのものを表す数値として教育現場において受け止められはじめたことが明らかにされる。特に標準学力検査については、高等学校入学選抜が激化するに伴い、五段階相対評価では測定しえない全国規模での学力の相対的な位置を測る科学的根拠として受容されたようである。

こうした変化の渦中であって、経験主義教育の主眼である態度の評価はどのような様相にあったのか。そこで第三章は、高等学校入学選抜や全国的な学力調査における態度に関する評価問題の質の変化に焦点を当てる。この時期の客観テストにおいて問われる態度は、経験主義教育が主題とした民主的かつ規範的な態度を保持していることではなく、社

会科の知識の有無に関連するものへと変質していく。そしてさらに重要な点として、社会科における知識の重視が、その反面態度の育成に資する教育課程として道徳の時間の設置を進める根拠となりえたことが指摘される。最後に第四章として、これまでにたどってきた歴史的変遷の総括として、全人格的な子ども観の具体化と客観的な評価の実施という戦後教育改革期の課題が、実現のための実践的な問題を解決できず、結果として全人格的な子ども観を棚上げしたことが示される。

以上、本書は戦後教育改革期における評価の実相について、導入期からその実質的終焉までの歴史的変遷を子細に追ったものであり、歴史的事実を跡付ける作業として得るところは大きい。またそれだけではなく、終章において提示されるように、歴史的事実を跡付ける作業からこれまでの認識を転換するような新たな知見が提示されている点にも注目したい。例えば従来、五段階評価や標準学力検査はその能力主義との親近性の高さが批判される傾向にあった。しかしながら本書が明らかにしたそれらの導入の経緯は、学力に応じた指導の実現や科学的な根拠に基づく評価を実現するという教育現場の意志を反映させたものであり、それゆえに必ずしも能力主義に直接結びつくものではないことが示されている。また 1958 年における道徳の時間の設置は、当時の保守的な教育課程改革の影響を受けたものとして理解される傾向にある一方で、本書は態度の評価の困難性という実践的な問題が、態度の育成に資する教育課程として道徳の時間の設置を呼び込んだことを明らかにしている。このように、これまでの見方を転換しうる新たな知見が歴史的事実を伴って析出された点についても、本書の意義として抑えておく必要がある。

最後に、歴史研究を専門としない評者の立場から本書の意義を付け加えておきたい。本

稿冒頭においても述べたように、本書の意義の中心は、すべての学校、すべての教師が取り組む共通のテーマとして評価という営みに着目することで、教育現場一般とその変化を記述しようとした点にある。その上で本稿では、何よりもその変化の記述が、可能な限り一面的にならない形で、文部省、研究者、教育現場、入学者選抜試験…といった様々な主体の絡み合いの過程ないし結果として描かれていることに着目したい。本書は、教育実践が教師のみによって形成されるものでもないことを鮮明に描き出している。言い換えれば、評価をめぐる重なり合う多様な主体同士の相互作用を通じて産出するものとして教育実践を描き出すことに成功していると言える。

ただしこの点について言えば、評価をめぐるさらなる多くの主体の連関を記述することも可能であったように思われる。例えば本書では中心的に触れられていないが、保護者の要望や公教育に対する社会的要求は、学校における評価という営みに対して相当程度に大きな影響を及ぼしたのではないであろうか。さらに言えば、人間の態度が行動の次元で全て数値化されて管理・評価される今日の科学技術の発展状況を考えれば、当時の教育実践を支えた環境、その技術的次元や物理的環境は、本書において辿られた歴史的な変化に対してどのような作用を及ぼしたのであるか。大きな物語に依拠することなく緻密に各主体の相互作用を追う本書の性質ゆえに、評価をめぐる繋がり合うさらなる広い連関を記述する可能性も感じられた。

しかしながら上の指摘は評者の個人的関心に基づくものであり、本書が学術的意義を大いに有することは間違いない。態度が学力として再度措定され評価することが求められている今日において、重大な示唆を与える貴重

な一冊であると言えよう。

(風間書房刊 2023年11月発行 本体価格
7,500円＋税)